

夕暮は雲のはたてに物を思あまつ空なる人をこぶとて

〔夫木和歌抄〔十九〕百首歌、あた雲、

慈鎮和尚

月のまへに時雨すぎたるあた雲をはらふならひは秋の山風

〔枕草子〕雲は玄ろきむらさきくろき雲哀也、風ふく折の天雲明はなる、ほどの黒き雲のやうやうしろふなりゆくもいとをかし朝にさる色とかや、ふみにもつくりけり月のいとあかき面に薄き雲いとあはれ也、

〔萬寶鄙事記占天氣〕雲ひがしへゆけば晴る、西へゆけば雨ふる、東南のかたへ行ばはるゝ是西北風なる故也、京都にては雲清水のかたへ行ば必はるゝ、乾の方雲あかくしてやうやくきゆるは晴赤くして又色變するときは風雨なり、魚の鱗のごとくなる雲あるは雨、又は風ふく、又ところどころに虎ふのごとく、こまかに横にすぢある雲たつは、是を水まと云、此雲見るゝかならず一兩日に雨ふる、又かた雲といふ有鹽のひかたのごとく、滿天に大なる横すぢ有、これも又やがて雨ふる、雲氣みだれとぶは、大風ふかんとする也、雲の来る方より、烈風ふき來る、其方の防をすべし、雲甚だあつくして濕ふは大雨、日の上下に雲氣有て、龍のごとく見ゆるは、かならず風雨、朔日十五日、七八日、廿三四日、晦日、雲氣四方にふさがるは雨、久しう日てりて赤雲天を過て、山谷をかゞやかすは明る日雨、秋の空に雲有て、縱くもりても風なれば雨なし、又東の方に雲を生ずるときは雨、雨やみ雲晴るとも、山頭を雲おほひかくす時は又雨ふる、朝日の上に黒雲有て、霧の如く日をおほひ日の光かたはらに射て、うすく黃白色なるは、其日風雨有、暮つかた日いる時にかくのごとくなれば、其夜風雨あり、朝東南に雲有ても、西北に雲なければ雨なし、暮にも又西北を見て雲なれば雨なし、上風吹て雲ひらくとも、下風雲あらば又雨、朝夕ともに雲ありても、段々になりて分明なるは晴、朝西にむらさきの雲たつは晴